

こつて裨益が少くない。就中最後の編中に元和八年戸澤氏就封以前の古文書を多く収録してあるのは其時代に於ける同地方の不明確な史實を考究するに多大の便宜を與へるものである。(四六版二二八頁、山形縣葛籠社發行價一、五〇)〔以上松野〕

●西洋中世の文化

文學博士 大類 伸著

本書は大正五年「西洋時代史觀—中世」の改版である。

内容の大部分を書き改め特に宗教、文學、美術等の精神文化方面は全く新しく起稿されたものである。著者に從へば中世の特質の一つはシムボリズムにある、この象徵主義の中世味は既に本書の装幀のうちになぞみ出てる。クリーム色の布表紙は淡小豆色の脊よく調和し、表紙の真中より少しく上めに暗黒色をバックに灰色の「美しき神」le Beau Dieu 即キリストの半身像畫がはられてゐる。此像は中世ゴシック建築の一大傑作、佛國ミアンの大寺が入口の柱に立てるもの、中世的意味での「完全」をこよなく象徴せるものである。暗黒色のバック

クは中世のシノニム所謂「暗黒時代」を、その中に浮出る「美しき神」像は宗教的中世を象徴し、像畫の黒色に對照してクリーム色の明さは中世に先立つ古代の明さかそれこそ中世に續く近世の光りの象徴かとも解されるであらう。斯本書は外容よりして、すでに、中世文化の内容を象徴してゐる。本書の取扱つてゐる問題の範圍は「中世の始」より「基督教世界の安定」、「社界及び國家、政治及び軍事」、「基督教文化とその一新」、「文學及び美術」、「經濟生活及び都市」、「中世の終」まで章を分つて七つ、節の總數廿四、五五五頁の大冊である。しかし中心的主題としては、十二、十三世紀即ち中世の高潮期を取扱つてゐる。本書の創意的特徴は著者の中世史觀即ち中世史變遷の跡付——不安動搖の時代、安定の時代、新生命發動の時代——にあると思はれる。著者は又中世を理解すべき者の取るべき態度に就て次の如く述べてをらる。それは第二章に於て「歴史的に考へれば基督教會は信徒の集合團體から發達したものである、即ち自然的發展の結果に過ぎない、併し地上に建てられたる神國としての教

會は決して後發的のものではなく、基督敎團體の成立に先在すべきものである。蓋し敎會は神より與へられたもので、人間の造り上げたものでないからである。此の意味に於て敎會は奇蹟であつて史的因果則の産物でない、我等はかゝる『奇蹟』を信ずることに依て始めて『中世』を理解することが出来る、『神祕』を信じない者には、史的生命的創造と建設とは遂に理解されないであらう。「こゝ含味すべき深みある言葉と思はれる。精神文化殊に美術方面に對して著者は獨特の理解を有つてをらるゝ、こゝは衆知のこゝ、本書全體として内容豊富、創意と暗示とに富み行文又暢達、一度巻をされば容易に之を措く能はしめざる魅力をもち到る處に著者獨自の姿を寫し出してゐる。又本書には網版色刷無色の挿圖二七葉あり、錦上華を添へ、巻末に中世史研究參考書目錄を十二頁に亘りて附せられたるは後進者のこよなき羅針盤なる。西洋史研究者は勿論敎養ある人士の一讀書たるは何人も異存なきこゝろに信ずる。（菊判五七七頁、東京富山房發兌、價四、五〇）〔中原〕

●銅銕銅劍の研究

文學博士 高橋 健自著

銅銕銅劍が吾が石金兩時代の特異な遺物として一方、銅鐸のそれと共に此の兩時代の間過渡期に屬するものと推考せられ近時其の研究の特に見るべきものあつて業蹟の顯著なものがある。題目のものは即ち前者に係る綜合的研究發表の第一者として見るべきものである。本邦發見の此種のもの約百餘例を數へ、朝鮮の約三十例と共に其の分布の九州北部を中心とし、四國、中國を含み畿内また其の出例あつて他方、銅鐸の分布に稍異なるものがあり、而かも兩者共に吾が石金兩時代の出現として肯定せらるゝ處のあるものである。斯かる興味ある題目を如何に解釋すべきかは吾が古代文化を知らんことをものに取つては見逃すことの出来ないものであらう。本冊は即ち十二章に分ち、分類、成分、分布、發見の事實、鑄造、型式の起源と其推移、分布と型式との關係、埋没狀態と遺跡の種別、伴出遺物に據れる考察、石劍との關係結論を以てし、ほゞ其の遺物の推究を各面より推究し得